

## 3-1 編集企画体制への道(2)

出版事業②「ハンドブック」を作る④「吸着」から「薄膜」へ

代表取締役 吉田 隆

NTSの主力商品である大型企画本、即ちハンドブックの現在の企画・編集スタイルには、「吸着技術ハンドブック」「薄膜作製応用ハンドブック」の2冊が大きく影響したと思う。今回は、この2冊の発刊にいたる監修者と編集者の係わりを軸に、ハンドブックの企画・編集スタイルの確立の跡を辿りたい。

### ●清水先生の仕事

「吸着技術ハンドブック」監修者としての清水先生の仕事っぷりは徹底していた。800頁分の原稿全てに目を通し、手を抜くことはなかった。疑問点が出るとすぐに電話がきた。5分後にあれはやったかっ!とまた電話がきた。電話に出た者が担当であるかどうかはお構いなしなのでしばしば社内は混乱した。声が大きく離れた所にも受話器の声が響いた。5時過ぎると本人が現われ、原稿に首っ引きで指示を出した。その間、編集担当の〇〇は他の仕事に手が付かなかった。清水先生の過剰な要求に困惑した彼女は私に訴えてきた。そこで、原稿の扱いや清水先生との対応をある程度アルバイトに任せることにした。それを誠意の喪失と感じた清水先生が、「私は監修者だ!自分の指示には責任をもって対応してほしい!」と怒りをぶつけられた。

清水先生との2年に及ぶこうしたやり取りの中で、監修者と共闘して企画を練り上げていくこと、その結果、気持ちと知識の両面で、この人ならば本書を任せてもいいという安心と信頼を監修者から得ることが編集者の条件であることなどを〇〇は身体で覚えていった。こうした時期を経て、NTSのハンドブックの企画・編集スタイルは、5年後の「薄膜作製応用ハンドブック」(平成7年発行)でエポックメーキングな年を迎えた。

### ●権田先生との出会い

「薄膜」というテーマとの出会いは、フジテク在籍中の昭和57年のことだった。ある日、東芝研究所の〇〇〇〇氏より「薄膜」を集大成した本を作らないかという

電話をいただいた。〇〇氏は監修者に電子技術総合研究所材料部(当時、現大阪大学名誉教授・福井工業大学教授)の権田俊一先生を強く推された。「薄膜の作成・評価とその応用技術ハンドブック」は昭和59年フジテクから発行された。その8年後の平成4年、フジテクの了解を得てNTSで改訂を行うことにし、本郷の学士会分館で〇〇を権田先生に紹介した。東京都内での会議の後、第二回目の編集会議は大阪で開催することになった。私は会議の運営を〇〇に一任した。当人にとり、遠地での編集会議を一人で切り盛りするという責任感と、会議のハイレベルの議論についていかねばというプレッシャーとが相まって、大いに緊張する局面であったようだが、編集者としての脱皮、自立を促す一つの節目の機会でもあった。特に大きい収穫は、会議の議長として企画全体の構想やその場の方向付けなどを的確に行い、強力なリーダーシップを発揮される監修者との出会いだった。それは「薄膜」という科学技術や、それを集大成する意義と方法論とを熟知した高度な専門性に裏付けられたものだったろう。その後、作業が執筆依頼に及ぶと、監修者としての力量を更に伺い知るところとなった。

学会などの編集によらない千頁規模のハンドブックの場合、200名からの執筆者を偏りなく公平に選ぶとなると、強い方向性を持つ企画であるほど、その項目立てや執筆者の選定に同調しない執筆候補者が少ない。そのため、進行管理に難儀することが多い。だが本書の場合、その苦勞が極めて少なかった。それは、監修者が産や学の立場を超えて信頼を得ているために他ならない。権田先生のご人徳と言う他ない。

大阪の会議以降、権田先生から編集方針や専門知識などのアドバイスを電話やFAXで受けることが増えた〇〇は、権田先生のために最高の本を作りたい、そのためには今のままではだめだと考え、

物理や化学の勉強を始めたと言語。

章立ての考え方、用語の統一、索引作りなど現在のハンドブック作りの基本となる企画・編集スタイルの多くは「薄膜」が原点といっても差し支えない。

### ●スタイルの確立へ

「吸着」と「薄膜」の2冊を通じてNTSのハンドブックの企画・編集スタイルは確立したといえるだろう。

それは清水先生と権田先生という二人の監修者との出会いと不可分である。お二人は実に好対照な監修者だった。動と静、情と知、技術と科学など言い方は様々であるが、共通していることは本作りにかける情熱である。その情熱を編集者と共有することから本作りは始まる。フジテクの小野社長や私の傍で、常に強烈な存在感をアピールし続けたドクター清水こと清水先生は平成10年、76歳でお亡くなりになった。

NTSの「薄膜ハンドブック」は学界、産業界の圧倒的な支持を受け続け、平成15年4月には「21世紀版薄膜作製応用ハンドブック」として、8年ぶりの改訂となった。出会いの年から数えると、日本の科学技術の発展とともに歩み続ける「権田先生の薄膜」の20年である。

### ●編集後記

春一番が吹き荒れ、花粉症の季節がやってきた。不幸にも私の遺伝子が作用したのか、長男もこのシーズンはポケットティッシュが離せなくなっている。ゲノム解読という今回のテーマ、産みの苦しみでパソコンに向かう時間が多かった。「先生、私の性格や体質が息子に遺伝したらどうなるでしょう?」「そんなものほっとけ」というやさしいお答えに、胸をなでおろしている。親から子に伝えるものは多いが、時として不要のものまで情報として伝達されていると思うと、ちょっと責任を感じたりもする。でも、私の両親も責任を感じてくれるのかな?それとも、ほっとけ、子供は子供、親は親…そうに違いない。何故なら、私の両親今でも私の欠点をお互いのせいと擦り合ってるんだから。(あしだ)

### ●編集部からのお願い

NTSニュースでは読者の皆様からのお便りや投稿をお待ちしております。また、開催予定の勉強会・イベント等、掲載をご希望される方は下記宛までご連絡ください。

〒113-8755 東京都文京区湯島2-16-16 (株)エヌ・ティー・エス「NTSニュース」係  
FAX: 03-3814-9152 E-mail: k-kunimoto@nts-book.co.jp

### NTSニュース

2004年3月号(通巻61号)  
2004年2月25日発行